

ステンドグラス法の進化と拡大

— 開発後に得られた新知見と施行法の工夫をめぐって —

河口 恭子*・馬場佐和子**・玉田 尚子***・小山内 實****

ステンドグラス法（以下 SG 法と略記）が論文に発表されて一年、我々四名の執筆者はこの間、さまざまな角度から SG 法を追試する中で、いろいろな工夫も試みてきた。SG 法の素晴らしさを再確認すると共に、新しい視点を手に入れたのである。例えば、子どもの主体性の特徴を再吟味するという着想、仲間意識を確実に醸成する具体的な実践、教室の雰囲気を明るくしそれを国際交流に役立てる方法、あるいは、SG 法は、実は、癒しの作用も併せ持っているという利点の確認などである。更に、新しい SG 法との整合性の問題が今後浮上してくる点にも触れた。

キーワード：色だけの絵、主体性、仲間意識、癒し

1. はじめに：四人の実践の開始

本論文の著者、四名は、これまでの活動を踏まえ、既に 2008 年 3 月末までに、4 月から始まる新年度に向けて、改めて、自分の担当するクラスの子もたちや学生を対象にしたステンドグラス法（以下、SG 法と略記する）を続けていって、子どもたちの自尊感情を高めると同時に仲間意識を高めてくれる、「SG 法の効力を確認しよう」を合言葉にしていた。その際、まとめ役の SG 法開発者の小山内からは、方法上の注意点、描画に関する注文は何ひとつ出されていない。それは、昨年度発行の、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第 28 号に繰り返し強調されている、SG 法の精神からいって、当然のことなのだから。

こうして新学期から、上記四名が担当する SG 法が、それぞれの勤務校で開始された。四名が SG 法を実施した回数とその対象者数は、各担当クラスの規模や、他科目の授業時間確保との関係もあり異なっている。実施中に得られた結果には、もちろん、四人に共通する傾向が見られるが、と同時に、それぞれ独自の工夫が編み出されたり、予想もしなかった、興味深い、知見と経験が得られている。

そこで、本稿の進め方は、先に、SG 法の基本画制作の手順について、簡単に復習しておく。その際、子どもの心の動きをできるだけ細かく辿ることに心がけた。それから、まず、たった今述べた、四人に共通する SG 法上の傾向を確認し、それから、四人各自が SG 法施行に当たり、重視した目標と工夫した点及び新しい経験内容に考察を加えな

がら、具体的に報告する。最後にこの同じ紀要 29 号の 1～9 頁に発表してある、「新しいステンドグラス法」（SG II ないし色絵四法と記載。これまでの SG 法を SG I と呼び名を変え、SG I と SG II を併せて、ステンドグラス法（SG 法）と総称してある）を視野に入れ、今後の SG 法に関して、具体的な実施法の模索の必要性を確認することになるだろう。

2. 4 人に共通する SG 体験

SG 法に初めて出会う子どもたちは、大抵の場合、最初の教示「今日は色塗り遊びをやります」を耳にすると、直接、「何すんの？」と口にしたり、言葉には出さなくても、多少の不安と緊張の表情をする。この不安と緊張は、彩色中に次第に薄れていって、やがては穏やかな気持ちになり、自然と楽しさに変化していく。もちろん、不安感を持つこともなく、これから何か楽しいことが始まるかもしれない、と期待する子どもも中にはいる。まず、ペアーを組んだ二人（三人でも変わりはない）に、それぞれ「自分の好きなクレヨン」を一本ずつ、選んでもらい、そのクレヨンで画用紙一枚（八切りないし A4 判大）に、半分ずつの枠を担当してもらい、2 色でできた 1 個の枠を（図 4 で確認できる）描いてもらう。この枠の出現に子どもたちは、これまで味わったことのない、不思議な気持ちに囚われる。子どもたちは、画用紙に枠をつけることによって、実は、枠内に自分の心が収斂し二人だけの世界が出現し初めていることは、知る由もない。

次の、同じクレヨンで線を引き合いマス目を作る場面では、「こんな風でいいのかな」と戸惑うことも多いけれども、5～6 本の直線・曲線・ギザギザ線でかなりの

* 伊勢市立東大湊小学校

** 伊勢市立御薊小学校

*** 伊勢市立北浜中学校

**** 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

マス目が出来、色の住む部屋が出揃うと、先ほどまでであった戸惑いは、ちょっとした安堵「荷降ろしの気分」に変わる。そして、しばし、枠に支えられた未彩色のたくさんのマス目が集まっただけの画用紙を「どういう画像ができてくるのかなあ」の期待と少しの不安が混じった気持ちで眺める。

ここで「色の仲間たち、みんな集まれっ！の気持ちで、相手と相談しながら、マス目をたくさんで塗っていきましょう」の教示がなされると、子どもたちは、作業全体の動きを大まかに把握できる。そして、やおら相手との相談が始まる。どちらが最初に塗り始めるのか。最初の彩色は何色にするのか。次の彩色はどのマス目にするのか、そして何色を使うのかなどである。この相手との相談と確認行為は絵が完成するまで、自然と続いていく。こうして、何の色も未だ塗っていない白かったマス目が塗色によって、どんどん色付けされたマス目になり、画用紙の鮮やかさが次第に増していき、最後のマス目の塗色が終わって色絵は完成し、基本画が生まれる。と同時に、子どもたちは、安堵の気持ちと強い達成感に襲われる。そして、促されなくても、あっちこっちで見せあいつこ（シェアリング）が始まる。そして、「わっ！すごっ！」「その色キレイだね」、「楽しいなあ」、「最高！」といった喜びと楽しさに満ちた感想が出される。こうした、子どもたちのさまざまな情動の動きが、昨年度の紀要論文で、かなりの頁を割いて報告した、クレッシェンド体験そのものである。

以上は、初めてステンドグラス法を試みた子どもたちの体験を、情動の動きを中心に述べたものであるが、二回、三回と繰り返していくと、作品がどんな変化を示し、子どもたちの気持ちはどう変わっていくのだろうか。

最初に見られる色絵の上での変化は、大雑把に「遊び心」と括ることのできる現象である。この遊び心は、遊ぶという言葉から連想される、気楽な心性ばかりではない。冒険、挑戦、工夫、緊張に裏打ちされたものである。図1では、目立たないように小さく人の顔を忍びこませているし、図2では「団子三兄弟」の様な形のものを右に描き、左には、カマキリの前脚を想わせる鋭い形のを配し、ハートまで描いている。つまり自由奔放な（自由勝手な）色絵に仕上げている。図3では、線を引いてマス目を作る段階までに既に画面全体の構成を考えていたことが十分に推測される。穏やかな波山と起伏の激しい波山を中心に据えたこの絵は、SG法の繰り返しがもたらしたものだと思えない訳にはいかない。というのも、これまで、最初からこうした傾向の絵を描いた子どもは一人もいない、という経験は、本稿執筆者四名に共通しているからである。つまり、SG法を繰り返すということは、「遊び心」を誘発することになるのである。

要するに、SG法を重ねていくと、子どもの心は、次

第に自由奔放になっていく。自由奔放という我々の形容は、子どもたちに対する我々の褒め言葉、賞賛の言葉である。第一、こうした、自由奔放な姿勢があって初めて、子どもたちは成長の礎を手に入れるのである。以上、四名の共通体験を述べてきたが、ここからは、SG法に関連して、四人それぞれが独自に、考えたこと、工夫した事、これまで予想しなかった体験等について報告する。

3. 子どもの主体性と SG 法

ここでは、繰り返して行った SG 法の実施中に経験し、考えさせられた、子どもの主体性に関して、発達心理学的な側面を重視しながら、二つのエピソードを紹介する。

①自分の縄張り（陣地）を相互に確保したペア

SG法の経験が豊かな（このクラスの子どもたちは、これまでSG法に限らず表現のさまざまな方法に挑戦してきた経緯がある）ここに紹介する小学二年生のペアは、ある日のSG法実施に際して、初めから、二人ともこう主張した。「(画用紙の)ここから半分は私」、「じゃあ、ぼくはこちら(の半分)」。こうして、二人とも、自分だけの領域をそれぞれ確保してから、描画活動に入ったのである。当然、自分の色塗りの面積は、最初の画用紙の半分である。そこで二人とも、まるで申し合わせた様に、別の画用紙を自分の領域の外側に一枚ずつ付け足して、塗色可能な面積を画用紙一枚分に増やしたのである。この二人の自己主張の特徴は、一方的な自己主張に終わってはいないことである。つまり、自分の意志を貫くばかりでなく、ちゃんと相手の主張をも承認している。ここには、相手を主体性をもった人間とみなす、暗黙のルールができていく。

小山内も同じ様な場面を大学生のSG法で確認している。SG法二回目の日、線引が終わり、彩色に取り掛かった場面で、X君は無言のまま、画用紙の右側から真ん中に向かって空色と青の二色だけで塗色し始めた。一方、これまた無言のY君は逆に左側から赤とピンク二色だけを用いてやはり中心に向かって彩色していったのである。一見、寒色系と暖色系の激突に見えたその色絵は、結局、画用紙の真ん中部分に点在していた四マスに塗られた黄色で、調和の取れた図像として完成したのである。これは、大学生の彩色をめぐる、自己主張と相互承認の場面であり、先ほどの小学二年生の陣地確保の場合と同じ原理が働いていて、興味深い。

②SG法での前作を「失敗作」と判断、描き直したT君

T君は広汎性発達障害の診断を受けている。T君のSG法の色絵の作り方の特徴は、線引きではぐいぐいと強く描き、塗色は、自分の好きな赤と紫二色の多用である。その中には自作の絵も含まれている、廊下に展示した全員の基本画をじっくり見比べたT君は、自分の方

から筆者に語ったのは、「日頃、母が、絵を描く時はいろいろな色を使うのが良いとアドバイスしてくれていること」、「同じ色が隣同士になるとキレイさが出ないこと、たくさん色を使うとキレイになることに着いたこと」だった。そして、「先生、もう一回やろう！」とクレパスを用意してきたのである。描き直した作品は、前作に比べてたくさん色が使われており、とりわけ、新作で印象深いのは、好きな紫を最後に残った小さなマス目に塗り、「これ、葡萄や!」と満足そうに話していたことである。(この3章の記述は河口)

4. 仲間意識を育む具体的な方法

筆者が心がけた課題は、仲間作りの実践だった。筆者が新担任の2年B組の生徒の中には特別支援学級に在籍しているものの、「いろんなことを友達と一緒にしたい」という気持ちが人一倍強いA君がいたことも、筆者の実践の動機の一つであった。筆者のSG法への注目、SG法の基本画制作だけに留まらない。

出来上がった作品を並べて様々な、「クラス全員の連帯意識・仲間意識」が自然と出てくるような言葉そのものを基本画をいろいろと組み合わせさせて並べて作っていくのである。図4を見て欲しい。これは『みんなともだち』を作ることに決めた時の、基本画7枚からなる、ひらかな「と」であることは、すぐに分かる。

この図4をみるだけでは「簡単に絵を並べただけではないか」と思われる危険性がある。しかし、実際にA4判大のしかも長方形の絵を用いてちゃんとした形のひらかなに整えていくことは、意外に難しい。実際に試みればすぐ分かる。図5は、『2B大スキ』のスローガンの最初の文字、2を構成するのに、どの絵とどの絵を組み合わせれば良いのか額を寄せ集めて相談している子どもたちの姿である。こうして出来上がった作品、『2B大スキ』を図6に示した。(この4章の記述は馬場)

5. 教室の雰囲気明るさと国際交流

中学1年の担任である筆者は、生徒たちに、完成した色絵をひとまとまりにして教室の入り口の辺り、黒板の隣に配してもらった。まず図8を見て欲しい。ひとまとまりにした基本画そのものは、図7に示してある。

たったこれだけの工夫で、「この教室明るくなったね」、「楽しいね」という声が聞かれるようになったのである。これはどうゆうことなのか。教室に入る時、いやでも目につくこの基本画の1枚一枚が、自分が作成した絵だけでなく、クラスメート全員の基本画と一緒にあって、制作時の楽しかった情動を一気に思い出させてくれるからではないだろうか。

2008年6月に国際交流の一環として、ベトナム中学生5名を迎え入れたのは、この教室だった。国際交流の授業内容を「ステンドグラス法」に決めたのも生徒たち自身で、まるで前から決めてあった様に、交流授業はスムーズに進んでいった。まだ英語のアルファベットを覚えるのが精いっぱいの子供がいるこの時期、英会話によるコミュニケーションは覚束ない。SG法は、この欠点を補って余りある。あちこちで笑い声が聞かれ、色絵に、日本語・ベトナム語・英語の単語を自由奔放に書き込んでいた。隣席のベトナムの男の子に「I love you」と挨拶(告白?)した日本の女の子までいた。ベトナムからの交流生たちは、自分の絵をデジタルカメラに収めていた。終りの参加者全員の記念撮影のバックを飾ったのは、当然、SG法による色絵たちだった。(この5章の記述は玉田)

6. 癒しとしてのSG法

SG法体験者の大学生の感想文に、「木曜日のこの午後の時間は、月曜日からの疲れがピークに達しています。ところが、色塗りをしている間に疲れがどっかに吹っ飛んでしまい、すごく気持ちが楽になりました(原文のまま)」というものがあった。この「癒される体験」について尋ねたところ、半分ほどの学生がはっきりと肯定していた。(この6章の記述は小山内)

7. おわりに

本稿において、我々四名の執筆者は、互いの文章を読み合い検討する時間を十分に取ることができなかった。しかし、1.のはじめに、で触れた様に、新しいSG法が誕生した以上、今後、SD IとSD IIの整合性と組み合わせの問題が、間違いなく浮上する。

文 献

- 小山内實ら 1989 枠づけ法における「枠」の意味
芸術療法 20巻 p7-13
- 小山内實・玉田尚子・河口恭子 2007 中学生描画の物語性—HTPアイテム選択法を実施してみても—
三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 27号 p35-40
- 小山内實・河口恭子・馬場佐和子 2008 ステンドグラス法—自尊感情と仲間意識を育む最適な方法の導入—
三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 28号 p7-12
- 河口恭子 2007 教育臨床の視点を授業の中でどのように活かしていくか—みんなで絵を描いてもっと元気になろう— 2006年度内地留学生研究報告書



图 1



图 5



图 2



图 6



图 3



图 7

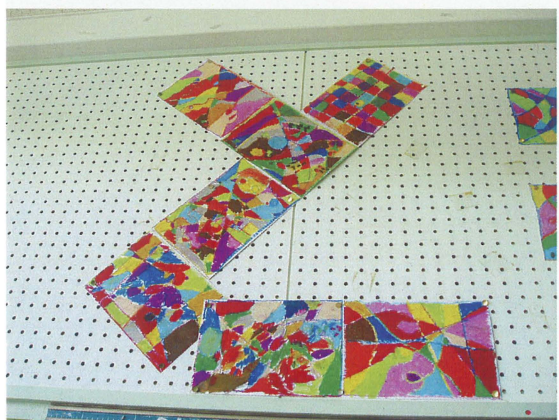


图 4



图 8